18 HIV感染患者における透析医療の推進

研究分担者　日ノ下 文彦
国立研究開発法人国立国際医療研究センター　腎臓内科　診療科長
研究協力者　照屋 勝治
国立研究開発法人国立国際医療研究センター　ACC病棟医長
多田 真奈美
国立研究開発法人国立国際医療研究センター　腎臓内科医師
片桐 大輔
国立研究開発法人国立国際医療研究センター　腎臓内科医師
別府 寛子
国立研究開発法人国立国際医療研究センター　腎臓内科レジデント
塩路 慎吾
国立研究開発法人国立国際医療研究センター　腎臓内科レジデント

研究要旨

HIV感染透析患者が漸増しているが、大学病院や感染症拠点病院、基幹病院以外の透析クリニック（サテライト）での受入れはそれほど進んでいないのが現状である。そこで、HIV感染患者の透析医療を推進し、透析施設における受入れを促進する為、様々な活動を行った。まず、サテライトが患者を受入れる時に困惑しないよう、以前に作成された「HIV 感染患者透析医療ガイドライン」初版を見直し、アップツデートでかつ実用的な「HIV 感染患者透析医療ガイド改訂版 2019」を作成した。また、HIV感染患者受入れに関する啓発活動が少なかった地域で講演会を企画したほか、透析医学会のランチョンセミナーや地域行政等による講習会、研究会に赴いて講演活動を継続した。血友病製剤でかつてHIV に感染した患者の対策にも目を向け、シンポジウム「透析受入れ困難を考える ― 高齢化と HIV 感染症、血友病 ― 」を企画した。これは、血液透析現場が直面している受入れ困難なテーマの中から高齢化、HIV 感染症、血友病を取り上げ、専門家に問題点を講演してもらい、最後にパネルディスカッションで解決策を議論し合うものである。その結果、一見 領域の異なるテーマの中から透析医療に関わる様々な問題が浮き彫りになり、今後のHIV 感染症対策や血友病への取り組みに役立てられる議論をすることができた。

A．研究の背景と目的

HIV 感染症の治療は格段に進化しHIV 感染患者の生命予後が改善したものの、一般人はもちろんのこと医療従事者でさえその多くは、1980年代のAIDS のイメージが定着したままとなっている。その結果、HIV 感染症のコントロールがうまくいっていても、広く社会に受入れられないケースが増えている。介護施設への入所や歯科での受入れはその典型的なケースだと思われるが、透析のサテライトにおける受入れもまったく同じで、hepatitis B virus (HBV) やhepatitis C virus (HCV) に感染した患者は受入れてもHIV 感染患者の受入れを拒む施設がいまだに多い。

そこで、筆者らは2016年度から2年間、「HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究班」に所属して、HIV 感染透析患者受入れを促進する為の

啓発活動、広報活動に努めてきた（日ノ下文彦、勝木 俊、照屋勝治、他. HIV感染透析患者受入れのための講演会の意義について ― アンケートの結果報告. 透析会誌 51: 313-19, 2018）。2018年度からは「HIV感染症の医療体制の整備に関する研究班」に所属して活動を継続することになり、従来の活動手法のみならず、これまでにない方法も取り入れて、HIV感染透析患者がよりスムーズに受入れられる体制作りに尽力することとなった。

B．研究方法

① 2010年に初めて作成された「HIV感染患者透析医療ガイドライン」の改訂版を作成した。

②「透析受入れ困難を考える ― 高齢化とHIV感染症、血友病 ― 」と銘打ったシンポジウムを開催し、現在、透析施設で受入れ困難となっている代表的課題の高齢化問題とHIV感染症、血友病を取り上げ、それぞれの専門家に講演をしてもらった後、演者や司会者らに加わってもらって、パネルディスカッションを展開した。

③ HIV感染患者が大都市圏に次いで比較的多いものの、受入れ促進の為の啓発活動があまり行われてこなかった長野県に焦点を絞り、長野市内で講演会「HIV感染症と血液透析 ― 決して高くない受入れのハードル ― 」を開催した。

④ 第63回日本透析医学会ランチョンセミナー3「HIV感染透析患者受け入れの実態」や東京都の医療従事者向け講習会「身近な地域で透析医療を受けるために～HIV陽性者の療養支援～」、国立国際医療研究センターエイズ治療・研究開発センター（ACC）救済医療室による「薬害HIV救済医療シンポジウム」などの公的な講演会に演者、司会者として参画した。

⑤ その他の地域単位の研究会において、HIV感染透析患者受入れを啓発する為の講演を行った。

⑥ 2017年度に実施したアンケート調査の結果をまとめた原著「HIV感染患者における透析医療の推進に関する第2次調査」を日本透析医学会雑誌に投稿した。

（倫理面への配慮）

本研究は、診療指針の作成やシンポジウム、講演会の開催、医療者向けのアンケート調査だけで、直接、患者に影響を及ぼしたり被検者になってもらう検討ではない。また、各講演会などにおける発表でも、患者が特定されるような個人情報やプライバシーを侵害する内容は含まれておらず、倫理的問題は全くないと判断した。

C．研究結果

①「HIV感染患者透析医療ガイド」（改訂版）の作成

まず日本透析医学会、日本透析医会、日本腎不全看護学会、日本臨床工学技士会の協力を得てそれぞれ2名ずつ改訂版作成委員を推薦してもらい、改訂版作成委員長（日ノ下）が推挙した2, 3名の委員を加えて改訂版策定グループを組織した。さらに、計4回委員会を開催し、2010年に刊行された初版の「HIV感染患者透析医療ガイドライン」をもとに討議を重ねて実用的な改訂版が完成した。なお、HIVの透析医療に関する客観的エビデンスが乏しいこともあり、本ガイドブックの内容および性格を考え合せ、「ガイドライン」とはせず「ガイド」と呼ぶことにした。本報告書作成段階では、「HIV感染患者透析医療ガイド」は刷り上がっておらず、実物は2019年4月以降に参照可能となる。

以下に、策定委員と委員会の日時を記す。

委員名簿

	名　前	所　属
委員長	日ノ下 文彦	国立研究開発法人国立国際医療研究センター
顧問	原澤 朋史	厚生労働省エイズ対策室
	横幕 能之	（独）国立病院機構名古屋医療センター（HIV感染症の医療体制の整備に関する研究班長）
委員	安藤　稔	慈誠会記念病院
	安藤 亮一	武蔵野赤十字病院
	薄井　園	東海中央病院
	菊地　勘	下落合クリニック
	栗原　怜	さいたまつきの森クリニック
	多田 真奈美	国立研究開発法人国立国際医療センター
	照屋 勝治	国立研究開発法人国立国際医療センター
	萩原 千鶴子	横須賀クリニック
	松金 隆夫	帝京短期大学
	山下 芳久	埼玉医科大学
	竜崎 崇和	東京都済生会中央病院

委員はアイウエオ順。敬称略。

委員会開催日時・場所

第1回　2018年6月16日（土）午後4時～7時
TKP 東京駅八重洲カンファレンスセンター 7D 会議室
第2回　2018年9月1日（土）午後2時～5時30分
TKP 東京駅前カンファレンスセンター ミーティングルーム 5B
第3回　2018年11月24日（土）午後1時～5時30分
以下、同上
第4回　2019年1月19日（土）午後12時30分～4時30分

HIV 感染患者透析医療ガイドの内容

諸言に始まり、本文は第1章「HIV感染症の現状と透析患者増加の可能性」、第2章「本邦におけるHIV 感染透析患者の現況」、第3章「HIV 感染患者に対する透析方法と受け入れ」、第4章「曝露後予防内服（post-exposure prophylaxis; PEP）について」、第5章「総括と提言」になっており、基本的なステートメントの後に解説するスタイルとした。なお、付録として19問からなる「Q & A」と「役に立つ書籍とURL」の項を加え、読者が困ったときに気楽に参照し疑問を解決しやすいよう工夫した。

② シンポジウム「透析受入れ困難を考える － 高齢化とHIV感染症、血友病 － 」

◆ 日時：2018年12月8日（土） 午後1時30分～4時40分
◆ 場所：御茶ノ水ソラシティカンファレンスセンター2階 テラスルーム
◆ プログラム

- 開会の辞：厚生労働省健康局結核感染症課エイズ対策推進室　原澤 朋史 室長補佐
- 講演1「問題の多い高齢透析患者の受け入れについて － 人生最終段階の医療も含めて － 」
  演者：長崎腎病院 病院長　原田 孝司 先生
- 講演2「血友病と HIV 感染症、そしてCKDと出血傾向患者の人工透析について」
  演者：東京医科大学 臨床検査医学分野 主任教授　福武 勝幸 先生
- 講演3「HIV 感染症と透析療法」
  演者：国立国際医療研究センター 腎臓内科 診療科長　日ノ下 文彦
  同「透析治療をしているHIV感染血友病患者の1例」
  演者：須田クリニック 理事長　須田 昭夫 先生
- パネルディスカッション「透析受入れ困難を考える！」
  司会者：日ノ下 文彦
  パネリスト：横幕 能行先生、福武 勝幸先生、原田 孝司先生、須田 昭夫先生、森 典子 先生（静岡県立総合病院腎臓内科 副院長）、鈴木 隆史先生（荻窪病院血液凝固科 部長）、照屋 勝治 先生（国立国際医療研究センター ACC 外来医長）
- 閉会の辞：HIV感染症の医療体制の整備に関する研究班長　横幕 能行 先生

③ 講演会「HIV感染症と血液透析 － 決して高くない受入れのハードル － 」（本研究班と長野県透析研究会／鳥居薬品㈱ 共催）

◆ 日時：2019年1月26日（土）午後5時～7時
◆ 場所：長野赤十字病院 第一研修ホール
◆ プログラム

- 開会の辞：長野赤十字病院腎臓内科 部長　小林 衛 先生
- 講演 1「HIV感染症と透析看護」
  演者：長野県立信州医療センター血液浄化療法室 看護師　豊原 美智子 先生
- 講演 2「長野県におけるHIV感染症の現状と課題」
  演者：長野県立信州医療センター 院長補佐・感染症センター長　山﨑 善隆 先生
- 講演 3：「HIV感染症と透析医療」
  演者：国立国際医療研究センター腎臓内科 診療科長　日ノ下 文彦
- フリーディスカッション
  司会進行：日ノ下 文彦
- 閉会の辞：長野赤十字病院腎臓内科　原田 真先生

④ 学会や公的研究会における講演

1) 第63回日本透析医学会ランチョンセミナー3（2018/7/29）
「HIV感染透析患者受け入れの実態」（司会および演者：日ノ下）
「透析医療者は知っておきたい、透析医療施設におけるHIV陽性者との関わり方」（演者：横幕 能行 先生）

2) 平成30年度東京都医療従事者向け講習会「身近な地域で透析医療を受けるために～HIV陽性者の療養支援～」（2019/2/14）
「HIV感染症とHIV 陽性者の透析療法 － HIV感染症はもう怖くない － 」（演者：日ノ下）

3) 国立国際医療研究センターACC救済医療室による「薬害HIV 救済医療シンポジウム」（2018/5/18）

「HIV感染症と透析療法」（演者：日ノ下）

⑤ 他の研究会における同様の講演（演者：日ノ下）

1) 第9回東富士腎セミナー（2018/7/3）

2) 東京腎疾患フォーラム（2018/7/12）

3) 第3回城南RIONA SEMINAR（2018/9/6）

⑥ 原著 日ノ下文彦、秋葉 隆. HIV感染患者における透析医療の推進に関する第2次調査. 透析会誌 52(1): 23-31, 2019

2017年10月、「HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究班」で実施した全国アンケート調査の結果をまとめ、2018年、日本透析医学会雑誌に投稿し、掲載された。

D．考察

HIV感染透析患者の受入れを促進する方法はいくつか考えられるが、いずれも即効性があるわけではなく、粘り強く医師や透析医療従事者の理解を深め誤解を払拭して認識を改めてもらうよう努力を続けるしかない。しかし、実際にHIV感染患者を受入れる場合、最も気になるのは具体的な透析方法や、HIV感染患者の取り扱い、急性疾患合併時の対応、水平感染の防止、職員のHIV曝露への対応などではなかろうか。こうした不安を払拭する最善の方法は、信頼できる指針が身近にあることであろう。そこで、以前作成された「HIV感染患者透析医療ガイドライン」を見直し、実用的で分かり易い内容を盛り込んだ「HIV感染患者透析医療ガイド 改訂版2019」を作成したが、本指針を各透析施設に配布する意義は大きい。これまでHIV感染症に馴染みがなかった施設でも、本ガイドに準拠さえすれば、安心してHIV感染患者を受入れられるよう編集されているからである。本ガイドの作成を提案し支援して頂いた厚生労働省エイズ対策室やHIV感染症の医療体制の整備に関する研究班に深謝するとともに、労を惜しまず執筆・編集・討議に加わって頂いた策定グループの皆様に御礼申し上げる次第である。

次に、研究班からの要請もあり、首都圏において血友病の専門家とHIV感染症の専門家、透析医療に詳しい臨床医、実際にHIV感染透析患者を受入れている透析医らが一同に会して、パネルディスカッションを行い意見交換できたのは、とても意義が大きいと思われる。HIVが混入した血友病製剤のせいでHIV感染症に罹患し、合併症に苦しんでいる血友病患者は多い。おまけに、慢性腎臓病(CKD)の進行によりやむなく透析を受けているHIV感染血友病患者が増えており、HIVの専門家のみならず透析医や透析医療従事者もそうした状況を理解し相互に連携して情報交換ができる環境を醸成しておく必要があったからである。少なくともシンポジウム「透析受入れ困難を考える － 高齢化とHIV感染症、血友病 －」の演者や参加者は、一見 異なる領域間の交流の重要性を認識したであろうし、透析医療現場が抱える受入れ困難な諸事例について理解を深めることができた。

啓発の為の講演会や講習会、セミナーは地味なようだが、参加者に直接訴えることができるうえ、不安や疑問を抱く参加者と直接意見交換ができるので、医師や透析医療従事者の意識を変革するうえで最も効果的である。既に確認されただけで数百名のHIV感染者が在住する長野県で研究班が企画した講演会を開催したほか、学会のランチョンセミナーや東京都主催の講習会等々で地道に講演活動を続けたので、HIV感染症に対する理解を深め受入れてくれる医療スタッフが少しずつ増えていくものと期待している。したがって、今後もこうした啓発活動は幅広く展開していく予定である。

HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究班が2017年秋に全国のHD施設を対象に行ったアンケート調査の結果は、同研究班の平成29年度報告書に速報で掲載されたが、詳細については記されなかった。今回、研究分担者（日ノ下）がHIV感染症の医療体制の整備に関する研究班に移り、その支援も得て、HIV感染患者における透析医療の受入れに関する実態を報告できたことは大きな成果であると言えるし、今後のHIV感染透析患者の対策を考えるうえで貴重な資料となるはずである。

E．結論

HIV感染患者の透析医療を推進する為の様々な活動に取組み、成果を上げることができた。

F．健康危険情報

なし

G．研究発表

1．論文発表

1) 日ノ下文彦，秋葉 隆. HIV感染患者における透析医療の推進に関する第2次調査. 透析会誌 52: 23-31, 2019

2) 日ノ下文彦，勝木 俊，照屋勝治，他. HIV感染透析患者受入れのための講演会の意義について — アンケートの結果報告. 透析会誌 51: 313-19, 2018

2．学会発表

1) 塩路慎吾，別府寛子，坂本絵美，三谷佑望，多田真奈美，日ノ下文彦. IgA腎症を発症したHIV感染症の2例. 第61回日本腎臓学会学術総会，6月，新潟，2018
2) 多田真奈美，赤木祐一郎，高橋真由美，他. HIV陽性血友病Aの患者に血液透析を導入した一例. 第63回日本透析医学会学術集会，6月，神戸，2018

H．知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1．特許取得

なし

2．実用新案登録

なし

3．その他

なし